

講演会 「流域思考の小網代保全」

講師/ 岸 由二さん

(NPO 法人小網代野外活動調整会議代表・慶応義塾大学名誉教授)

日時：2016年10月23日(日) 13:30~16:30

会場：我孫子市生涯学習センター アピスタ ホール 後援：公益財団法人 山階鳥類研究所

開催趣旨

三浦半島の小網代の森は、中央にある谷に沿って流れる「浦の川」の集水域（流域）として、森林、湿地、干潟及び海までが連続して残されている、関東地方で唯一の自然環境と言われている。そこを保全し、再生させ、利活用されているNPO法人小網代野外活動調整会議代表の岸由二さんにお話を伺い、手賀沼の自然環境を流域の規模で考える機会とする。合わせて、手賀沼流域で森林、里山保全活動をしている市民活動団体として、大津川をきれいにする会の事例報告とその他6団体によるポスターセッションを実施し、活動を紹介する。

講師プロフィール

慶応義塾大学名誉教授。理学博士。生態学を専攻。鶴見川流域、小網代、多摩三浦丘陵（いるか丘陵）で、〈流域思考〉にもとづく都市再生の理論・実践を推進中。NPO法人鶴見川流域ネットワーク、NPO法人小網代野外活動調整会議、NPO法人鶴見川源流ネットワーク代表。著書に、「いのち集まれ小網代」（木魂社 1987）、「自然へのまなざし」（紀伊国屋 1996）、「環境を知るとはということか」（PHPサイエンスワールド新書 2009）、「流域地図のつくり方」、「奇跡の自然の守りかた」（ちくまプリマー新書 2014）。訳書に、「利己的な遺伝子」（ドーキンス）、「人間の本性について」（ウイルソン）、「進化生態学」（フツイマ）など。



講演概要

2011年、三浦半島の小網代の森が流域の規模で保全された。1985年、ゴルフ場予定地となった当地は、どのような経緯で保全され、どのようなビジョン・実践のもとで環境回復のプロセスに入っているか、流域思考の視点で紹介する。

NPO 法人小網代野外活動調整会議

1998年、小網代の保全確定にむけた行政努力を応援する市民側連携組織として設立。2001～2005にかけて神奈川県との協働事業に取り組み、2005年NPO法人となる。以後、小網代保全のための啓発・実践事業をすすめ、2011年、同地が近郊緑地特別保全地区に指定されたことをうけ、神奈川県、三浦市、かながわトラストみどり財団と連携して、小網代流域の、安全、魅力化、多自然化対応を推進する実践法人として活動し、2014年夏の散策路完成にともなう一般開放後は、企業との連携や各種訪問団体の案内等にも注力している。



手賀沼流域事例報告「大津川に再びホテルを夢みて」

発表者/ 大津川をきれいにする会 会長 長原 邦子 さん

発表者プロフィール

夫の転勤のため、1981年より現在の柏市高柳に在住。2004年大津川をきれいにする会に入会后、2008年副会長、2013年会長就任。民生委員児童委員、柏市不法投棄対策協議会委員。ボランティアでパソコン教室開催。



大津川をきれいにする会

「大津川をよみがえらせ、再びホテルの里に」を夢に、大津川をきれいにする活動を通じて地域の環境向上と手賀沼浄化に努め、併せて会員相互の親睦を図ることを目的として2004年4月にスタートしたボランティア団体。大津川の清掃活動や、樹林地の地主さんと共に柏市の「カシニワ制度」を活用しながら、緑の保安全管理を行っている。今年度は第27回全国「みどりの愛護」のつどいにおいて国土交通大臣賞を受賞した。

次 第

- 総合司会 公益財団法人 山階鳥類研究所 平岡 考さん
- 13:30 主催者挨拶 手賀沼流域フォーラム実行委員会 委員長 八鍬 雅子
手賀沼水環境保全協議会 事務局 森 美則
(千葉県環境生活部水質保全課長)
- 13:35 来賓紹介
- 13:40 講演「流域思考の小網代保全」 岸由二さん
質疑応答
- 15:20 ポスターセッション (休憩)
＜参加団体＞
■手賀沼森友会(柏市) ■一球会(柏市) ■NPO 法人手賀沼トラスト(我孫子市)
■岡発戸(おかほっと)・都部(いちぶ)の谷津を愛する会(我孫子市) ■NPO さとやま(流山市) ■亀成川を愛する会(印西市)
- 15:00 手賀沼流域事例報告「大津川に再びホテルを夢みて」 長原邦子さん
質疑応答
- 16:30 閉会の挨拶 手賀沼流域フォーラム実行委員会 副委員長 中野 一宇

全体会の様子

(ポスターセッション6団体)



プレパネル展 (館内)

講演「流域思考の小網代保全」

講師/ NPO 法人小網代野外活動調整会議代表理事・慶應義塾大学名誉教授 岸由二さん

■ 一大リゾート開発予定地が流域丸ごと残った

ご紹介にあずかりました岸です。40年ほど慶應義塾大学で教員をしていました。専門は生態学で、リチャード・ドーキンス『利己的な遺伝子』の翻訳などもしています。東京都立大学(当時)の生態学教室にいましたが、植物も動物も生態系として丸ごと扱うことを理念としたバイオエコロジー(bioecology)の研究者、宝月欣二、北沢右三などの先生がおられました。ぼくは先生のいうことを聞かず、市民運動をやって論文も書かない院生でしたが、先生たちに一番影響を受けたのはぼくだと思います。そして、丸ごと自然を扱う、特に都市域の自然再生を何とかするのがぼくのミッションと思っています。キーワードが流域です。都立大学時代、翻訳した専門書で気づき、50年近くこの考え方で活動しています。

三浦半島の南の端に位置する小網代は関東地方で唯一、完結した自然の集水域生態系です。どの川にもその川に水が集まる領土があり、山のとっぺんまで入りますが、その広がりその川の集水域、または流域と言います。そして、小網代と呼ばれる流域生態系は、行政、企業、地権者、トラスト財団の努力、アカテガニが暮らしていることへの多数の市民の共感が力となって、2005年に保全が実現しました。2014年夏、一般公開され、私が代表をしているNPO小網代野外活動調整会議による継続的な手入れ作業で、さらなる回復、魅力創出の時代が始まっています。

去年(2015年)、京浜急行電鉄が電車の中にこういうチラシを並べました。これは一部の人には大変衝撃的でした。1985年、今日小網代の森と呼ばれる流域は、京浜急行電鉄がすべて開発してホテルとマンションとゴルフ場にする予定地でした。見ようによっては、岸をはじめとする市民団体がこれを阻止し、企業の開発を止めたと見えます。そう考えている過激な市民団体はたくさんあります。事実はそのではありません。運動をリードしてきたのはぼくらですが、忍耐我慢で代案を提示し続け、最終的に京浜急行電鉄も「ゴルフ場にするより先生たちの言うようにするほうが企業のため」と判断をして、行政、企業、市民団体合意のもとに全体保全した場所です。だから、こんなポスターは「市民の反対運動で開発が阻止された」と思う人には仰天ですし、「岸先生たちが企業に丸飲みされた。これからとんでもないことになる」とも読めるわけです。



このポスターの影響もあり、また去年の5月1日、パクンというハーバード大学出のインテリお笑い芸人と子どもたちが、ぼくと一緒に小網代を散歩するという20分の番組をNHKが流しました。ゴールデンウィークのおすすめ散策コースとして、千葉県房総と高尾山と小網代の3つを紹介しましたが、房総は1泊しなければならない。高尾山に行くには山に登る恰好じゃなきゃいけない。小網代はスリッパでも行ける。とわかれば、みんな小網代に来ますね。翌日9000人いらっしゃいました。小網代は長さ1.3キロほどの谷ですので、上から下まで散策路が全部人でつながりました。

こういう光景を見ると「自然破壊が起こる」という人がいます。このときも騒いだ人がたくさんいました。しかし、来た人は木道から絶対に外れられません。1万人来ようが2万人来ようが大丈夫なように作ってあります。翌日6000人、翌々日4000人と3日間で2万人来ました。去年の小網代の集客力は三浦市の概算で15万人くらいと言われています。今年は少し落ちましたが、大変な集客力です。



■ 首都圏近郊緑地保全法という古い法律で保全

この写真が小網代です。向こうに見える海は相模湾です。天気の良いときは正面に伊豆半島、天城山が見えます。右側は富士山です。左は大島です。絶景地です。そこに緑色の銅鐸のような形の領域があります。面積70ヘクタール。手賀沼の10分の1です。緑色なのは、開発されずに全部残ったからです。浦の川という1200メートルほどの小さな川に雨水が集まる地べたが丸ごと保全されました。里山としての部分的保全をするのではなく、流域という自然の体系で丸ごと保全するのが妥当とぼくはずっと主張し続けていて、それが「流域思考」のひとつの表現です。



完結した流域生態系
小網代は、森と干潟と海

(C) 神奈川県青少年センター

ぼくは長く(国土交通省の)河川分科会、昔河川審議会と言った委員会の委員をやっていて、国の河川政策や下水道政策などにいろいろ話ができる位置にいます。小網代を丸ごと守ったのは自治体でも環境省でもなく、国土交通省でした。流域という概念の重要さがわかるのは、残念ながら国土交通省の昔の河川局周辺だけです。運よく国土審議会に審議がかかって、保全ということになりました。2年前、2014年の7月19日に小網代の森施設完成式典がありました。神奈川県知事、京浜急行電鉄社長、三浦市長、私も参加しましたが、1400メートルの散策路ができたことをもってオープンしたということです。

小網代は首都圏近郊緑地保全法(国土交通省)により、近郊緑地保全区域に指定されました。まさかこんな古びた法律(注：昭和41年制定)でこんな重要な地域を保全するなんて誰も思っていませんでした。かつて国土庁は「首都圏に壮大なグリーンベルトを作らなければならない」と提案し、労働運動につぶされて消えたことがありました。しかし、首都圏は見渡す限りの住宅地で、大洪水、大震災があったら逃げ場がなく、とんでもない人が死にます。そこで、かつてのグリーンベルト予定地確保のための用語を使って首都圏近郊緑地保全法をつくり、未利用が大半を占めている大きな緑地はとにかく国交省が確保し、乱暴な開発がないようにしておこうということになりました。



平成15年撮影

この規制を、かつてのグリーンベルトで予定された大緑地帯とは別な領域である三浦半島、多摩丘陵域に設定したのです。小網代周辺にはそういう設定地域がたまたまいくつもあり、小網代も同じでいいだろうということになりました。面積が狭すぎると問題になりましたが、流域生態系という重要な地域であるという特別配慮で保全されました。保全された地域はおおむね浦の川に雨水が流れ込む流域です。干潟は引き潮のときは陸ですが、上げ潮のときは海。しかし、拡大解釈で全体が保全されました。

■ 川を氾濫させ、ササ原を湿原に変える

小網代は入り口に看板があり、急な階段が谷の入り口から谷底まで続いています。アカテガニというカニが森の中にいっぱい暮らすカニの谷です。陸生のカニなので、普段は川や海でなく山の中にいます。夏には木の上で見られます。木の上で虫を食べたり、交尾をしたりしています。

さらに進むと、湿地林が広がります。アカテガニがいてハンノキが広がる光景を楽しみながら 1 キロほど散歩してもらいますが、支流が合流するたび景色が変わります。2つの流域が合体すると水と土が増えるので、生態系が変わります。小流域の合体で生態系が変わることを生かして保全しています。

保全の要のひとつがこんな仕掛けです。低地帯ではかつてのササ原が全部湿原になっています。ダムのような構造物で雨を堰き止め、水を氾濫させます。ぼくは普段、国交省の仕事でいかに氾濫を阻止するかに頭を使いますが、小網代ではいかに氾濫させるかに頭



を使います。原理は同じです。氾濫させることで乾燥したササ原を湿原にします。湿原にするとトンボや生きものが返ってきます。東京都と神奈川県絶滅危惧種のサラサヤンマなどがいます。

再生された湿原にはこんな木道が続いています。谷を抜けると大きな湿原が現れますが、5月6月はすごい数のホタルがいます。ヘイケボタルとゲンジボタルが出ます。今年(2016年)5月末は一晩で 1350 匹を数えました。手つかずの自然を残したからではなくて、ササ原のササを伐採し、4年間で湿地にし、流れに1年じゅう光が当たるようにしたら、5年間で 1000 匹出るようになりました。休息所もあります。標高7メートル。予想されている相模トラフの大地震が起こると大津波はここまで来ますので、散策者が山に逃げるための津波避難路もあります。ここはスワンプ(沼地)。湿原に柳がいっぱい生えています。乾燥したササ原を全伐して小川を通し、ジャヤナギという野生の柳をぼくが 25 年前から手で挿し木してきました。下流には泥湿地が



あります。木道をつくる時ブルドーザーで掘りましたが、その跡をもとに戻すと神奈川県が言うので、戻さないよう頼みました。農家が田畑にする前、谷にはこんな水たまりがいっぱいあったに決まっています。



1年じゅう水がたまる泥地があったほうがいい。これが大当たりで、絶滅したと思われていたアカガエルが大量に帰ってきました。土中に埋蔵されていたミズオオバコやコナギなど、神奈川県では貴重な湿原植物もどんどん芽を出しています。手をつけてブルドーザーで掘った跡を残したから、絶滅危惧種があるんです。ぼくの理想ですが、原生自然と錯覚するような自然を全部、手入れをしてつくりました。それを誰でも楽しめる場所にしています。



河口の湿原には夏はハマダイコン、ハマカンゾウが咲き乱れます。ハマカンゾウは3.11の津波で生息域の大半が消え、盗掘で全滅しかかったのを、東芝ライテック(株)さんと大日本印刷((株)DNP テクノパック)さんが協力してくれて、企業敷地で増やしてくれました。増やしたものを2015年に大量に戻しました。初夏には1000匹くらいアユが上がります。それをカワセミが食べています。

この橋が浦の川の河口です。手前が保全地域で向こうが海。引き潮には全部、泥干潟になります。橋の向こうの干潟の保全はこれからです。橋は大津波でかなり崩壊し、根元も傾いたので通行禁止となりました。いずれ周辺は干潟に戻るので、保全された干潟の中に遺跡として残ります。明治時代はこの奥まで干潟でした。明治以降、山を崩して干拓した場所が、津波ののちに干潟に還っていく。波の作用にまかせて干潟に戻すことになっています。



これが橋から引き潮時の干潟です。左右の岬まで全部干潟が出ます。塩水沼沢という貴重な塩水湿地が干潟と森をつないでいます。エコトーンと呼ばれる場所です。夏には一面カニがいて、求愛ダンスをしています。こんな小さな領域にこんなにたくさんカニが棲むところは日本でも珍しいと思います。



土木作業が忙しくてあまり生物調査をやっていませんが、2001年にまとめた生物種は1892種。干潟と森で3000~4000種類いると思います。特にすごいのは干潟です。絶滅危惧種ランクのついている干潟の生物種はとんでもない数がい

●動物		1,012
★脊椎動物	ほ乳類	9
	鳥類	88
	爬虫類	11
	両生類	5
	魚類	80
★節足動物	昆虫類	563
	甲殻類	58
	クモ類	111
★軟体類	陸貝	22
	その他	44
●菌類		242
●植物		638
	被子植物	581
	裸子植物	7
	シダ植物	50
◆全体		1,892

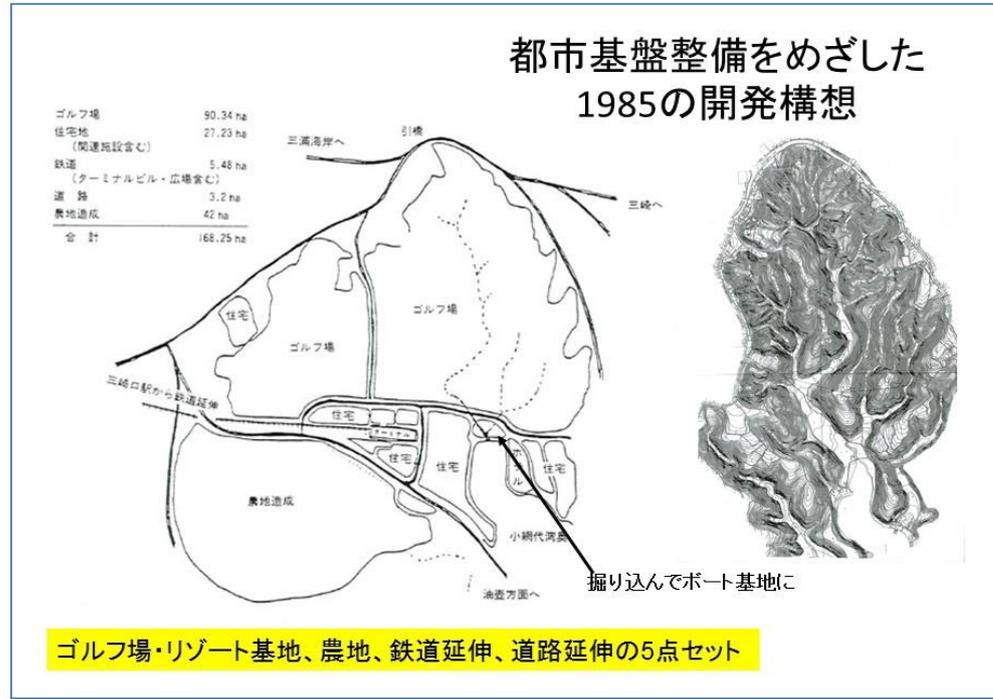
て、面積あたり東日本一だと思います。なぜそんなにすごいかというと、干潟に水が注ぐ流域に家も工場も道路もないから、いろいろな栄養分がよいバランスで入ってくるのだと思います。想像を絶するような細かい棲み分けで多様な生物がいます。ラムサール条約条件は楽々クリアしていますが、漁協の協力などいろいろむずかしいので登録していません。条約で上から保存するのではなく、マナーを広めて小網代干潟を壊さないようにしつつ、観光業や漁業と共同して、神奈川県条例で

の保全を目指しています。まだ少し時間がかかります。これは小網代湾。ここから 1500 メートルくらいリアス式の湾が広がり、相模湾につながります。



■ 開発には一度も反対したことがない

これは 1985 年に発表された小網代の開発提案です。全体約 160 ヘクタールの中にゴルフ場、リゾートマンション、リゾートホテル、鉄道、道路を作り、農地造成をやるという提案です。ぼくらは開発賛成という意思表示をしました。「農地造成も住宅も道路も鉄道もやりましょう。でも、ゴルフ場はやめましょう。そ



して、小網代の森を丸ごと残しませんか」というアピールを 1984 年から 30 年以上、やり続けてきました。それ以外のことは何もしていませんが、時代が変わりバブルが飛んで決着したら、われわれの提案どおりになりました。

これはぼくがはじめて小網代に入った、たぶん 1984 年の写真です。ガサガサの荒れ地で、ここを守る意味があると思った地元の人はず一人もいなかった。保全すると言い出したとき、青年会議所の人たちから「おれたちの土地で自然保護やるのはやめてくれ」と言われました。でも、ぼくはこのとき流域単位で磨けば小網代の谷と干潟と海はアジアで文句なしの一番、世界規模になると読んでいました。



1990 年に国際生態学会議があり、世界の景観生態学者が小網代に来ましたが、ほとんどがぼくと同じ意見でした。ここはすごい、磨けばとんでもないことになると。それを脇で聞いていた神奈川県課長が絶大な協力者になりました。残念ながら道半ばで亡くなりましたが、「命を懸けて守るから、岸先生、一緒にやろう」と言ってくれました。そして 1995 年、県が保全したいと言い出しました。お金も制度もない。これを解決してくれたのが国土交通省で、この形になりました。



■ 人が全面的に手を入れて、生態系保全を図る

学術的な根拠はすでに十分と判断して、次にアカテガニ応援団を育てました。このカニは山に棲みますが、お母さんは海にお産に行きます。赤ちゃんは1ヵ月海で暮らし、小網代に帰ってきます。夏の満月と新月の夜、小網代の海岸にはアカテガニの母親がお腹に仔をいっぱい抱えて集まります。潮が満ちてくると海に入り体を震わせませす。ミジンコのような仔が数万匹海に放たれます。これが海で育って帰ってきます。「かわいいよ」と言ったらどんどん人が来ました。来た人は海に入れ、真っ暗な中、みんなで集中してアカテガニの産卵を見ます。帰りに「寄付をください」「神奈川トラストみどり財団の会員になってください」とお願いします。4年間で4000人がトラスト会員になりました。

谷底部は徹底的にササ刈をして湿原にしています。しかし、放っておくと3年でササやぶに戻るので、毎年1500万円くらいかけて保全しています。ぼくらの管理方針は「流域思考でやる」です。小網代という流域が持つ多自然ポテンシャルを生かし、安全で魅力的で生物多様性豊かな持続的管理可能な場所をつくる。「復元しよう」という思想はまったくありません。水田に戻したら誰が田んぼやりますか？ 縄文時代は谷が刻まれて真っ暗な大森林ですから、ホタルもトンボもいません。いつに戻すかという客観的な基準はありません。「昔に戻すのが正しい」というのは日本の環境省、東大京大を中心とした保全生態学の主流ですが、理論的に間違っていて、最近では国際的に叩かれて動揺しています。小網代が日本の新しい方向のモデルになると思います。

最下流は草地湿原で大きなエノキがあり、脇にテラスがあります。6年前は高さ4メートルのササが繁り、そこにツルクサが絡まって、火をつけば山火事になる。そういう場所でした。エノキは頭だけ見えていました。2011年、ササ伐採を始めました。そして、雨の水が流れる水路をつけ、大雨時に水浸しになるようにしました。準備ができたところで、神奈川県に木道とテラスをつくってもらいました。農業的な作業をやめて50年放置し、美しい自然が残ることは日本国にはありません。山火事が起こるやぶになります。小網代は手つかずの自然ではなく、



人が手を入れたからすごいのですが、それには農家に農業を続けてもらうか、われわれのように全面的に手を入れて生態系再生を図るしかありません。

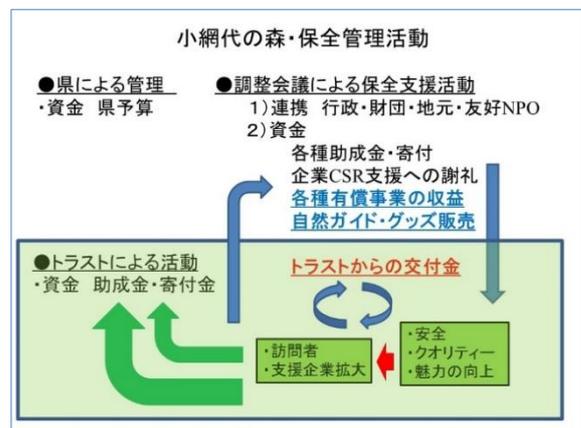
努力が認められ、平成 24 年、内閣総理大臣表彰を受けました。このとき、天皇皇后と立ち話をさせていただきました。皇后が小網代にぜひ行きたいと言うので整備される時期をお教えしたら、今年(2016年)7月、極秘で両陛下がいらっしゃいました。秘密にしていたのですが、一昨日、皇后が誕生日の文書に「夢が叶って小網代に行けました」と書かれたので、フェイスブックで白状したところです。



平成24年 内閣総理大臣表彰

■ 関係者全部がうれしい「ウィンウィン」のシステム

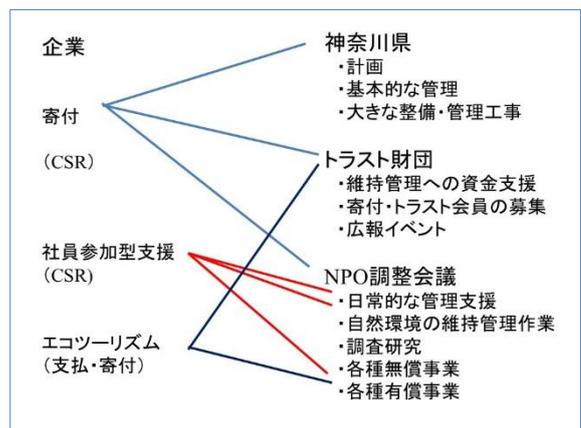
手入れにはお金がかかりますが、神奈川県、三浦市、財団との協定に「NPOが自分たちでお金を集めてやる」という覚書があります。木道の敷設と管理が神奈川県の仕事で、そのほかの管理は全部 NPO が独自の資金獲得でやっています。県が資金を出せるようにするためには、たとえば都市公園決定をして、指定管理者を導入する必要があります。そうしてしまうと多自然創出のビジョンが貫徹なくなってしまうので、県も、私たちも同意の上で、NPOの自主努力の財源確保の道を選んでいるのです。その上で、企業にも個人にも助けてほしいという運動をしています。われわれなら 2000 万円で管理できる、だから 2000 万円稼がせてくださいと言っています。



去年の経費は約 1500 万円。赤字をスタッフからの寄付などで数百万円補てんしているので、対外的には黒字です。資金は各種助成金や寄付です。有償事業の収益もあります。小網代の森ではわれわれだけが物販できません。訪問者 15 人単位で 1 万円、ガイド料ももらえます。頼りはトラスト財団です。昨年度は 400 万円ほどの交付金をうけているのです。

トラストの会員も募集しています。個人会費は 2000 円。ぼくはトラストの評議員として 2008 年に「イギリスのナショナルトラストのように会費を 5000 円にしよう」と提案しました。反対意見もありましたが、2000 円が会費、3000 円は小網代をはじめ神奈川県が認定する団体に会員が指名して寄付できるようにしました。全部で 3 団体あり、小網代はその 1 つです。順調に 5000 円会員が増えています。ほとんど小網代が指名され、3000 円分が活動費で入ります。

また、トラスト財団には「亡母が好きだった神奈川の自然保護に 200 万円寄付します」といった寄付があります。そうした寄付が 3 団体の支援者数に比例配分して



上乘せされ、3000 円が 1 万円くらいに増えるようになりました。ですから、われわれは「トラストに入ってください」という勧誘もします。そうすると神奈川県もうれしい、トラストもうれしい、われわれもうれしい、小網代の自然は一番うれしい、訪問する人もうれしい。5 者ウィンウィンです。

企業にも期待しています。大きく寄付してくれた企業が 2 社あります。「この小流域は〇〇社が運営して整備しています」、「こっちは〇〇社です」という形で継続して保全を行う方法を始めています。まず、東芝(株)がハマカンゾウの育成地支援として、250 万円ぽんと寄付してくれました。楽天もひとつの小流域の再生にお金を出してくれることになりました。地元の大企業とも調整に入っています。うまくいったら、次は京浜急行。そういう仕掛けで年間 1500 万円、2000 万円の必要な資金を得ようとしています。



小網代にやってくる人の中には日傘をさしたおばあちゃんもいます。自然はバックパッキングに耐えられる人だけが行くべきという主張にもぼくは賛成しません。尾瀬のアヤメ平保全が一番大変だったころ、アルバイトで何日も土木作業とゴミ拾いに行きましたが、ああいう場所は原生自然を保全すればいいんです。でも、町中の谷戸はもっと緩やかでいい。小網代は中間です。普通の人がたくさん入ってお金を落としてくれて、そのお金をわれわれが活用して、安全で魅力的で生物多様性を極限まで豊かな場所に小網代をする。そういう作業をしていきたいと思っています。

「小網代は流域思考のイーハトーブ」。これは(株)トヨタマーケティングジャパンの部長さんが小網代に来て感動し、残してくれた言葉です。小網代はおかあさんと子どもが来て自然にふれて、自然の大好きな世代に育ってくれて、これを企業が大応援して守り続けていく場所にしたいなあと思っています。

【質疑応答】

● 三浦半島の自然保護団体と一線を画して

Q 三浦半島のほうで保全をやっている知り合いに今日の話を話したら、「岸さんですか〜」と含みのある返事でした。今日お話を伺ってわかりました(笑)。

岸 わかったでしょう?(笑) 小網代保全には「労働組合とジャーナリズムを使った政治闘争で企業を倒す」という運動があり、三浦半島の自然保護団体は全部そっちでした。ぼくは常に同じことしか言いませんでした。最終段階でどう守るか 2 つ選択肢がありました。ひとつが「一部を都市公園にして施設をつくり、指定管理する」で、都市計画部局が担当します。一緒にやってきた環境農政局はこれには反対で、ぼくらと一緒に小網代を生物多様性豊かな場所にしたい。政治的緊張があり、当時の民主党の県会議員さんたちは都市公園指定に賛成していたと思います。

また、小網代の隣に北川という谷がありますが、三浦半島の自然保護団体は小網代の保全が決まってから突然北川の保全運動を始め、裁判闘争もやり、大新聞がそろって大報道し、人間の輪でまわりを囲むことまで企画しました。しかし、都市計画法でがんじがらめに決まっているので、埋め立ては進んでしまうと思います。1984 年の小網代のポラーノ村構想で、ぼくらはここ(北川)を緑と住宅、リゾート施設などの共存する地にすることを提案しました。北川は地形まるごとは守れない。それなら北川地域は緑と暮らしの共存領域にして、小網代の谷を流域単位で全部残しましょうと提案しました。ぼくは今で

もこれが正しいと思っています。

Q なぜゴルフ場が特にいけないのですか。

岸 小網代の保全運動を始めたのは、ポラーノ村を考える会という不思議な集団です。ゴルフ場開発をするくらいなら、理想郷を作ろうという話でした。ポラーノ村とは森の中に味噌工場や劇場などがあるような場所です。慶應大学の自然科学の同僚で脱原発運動をやっている藤田祐幸さんが始めた運動でした。構想を見せられたとき、ぼくはゴルフ場開発の方がいいかと、言いました(笑)。小網代に味噌工場をつくったりしたら干潟は無茶苦茶です。ゴルフ場のほうが干潟や海を守れるからポラーノ村には反対と言いました。それならどうするかと聞くので今日のような話をしたら、「ポラーノ村は解散するから、岸さんの戦略でやってくれ」と言われました。

ぼくは今も馬鹿な開発をするくらいならゴルフ場のほうがいいと思っています。ぼくらは毎月のようにゴルフ場の下手で生物調査をやっていますが、今ゴルフ場にまかれる薬剤でトンボやカエルやホタルは死にません。民家から出る洗剤で死にます。人の意識がゴルフ場や企業は絶対悪と固まっていて、技術や環境調整の進歩の現状がわかっていません。でも、文句が出なければゴルフ場も無茶苦茶をやりません。ゴルフ場を擁護しているわけではありません。

● 企業の CSR ではなく宣伝広告費を誘導する

Q 企業からお金をもらっても、ネーミングライツ、企業の名前をそこにつけるものではないのですね。

岸 企業の寄付で最も単純なのは CSR 寄付です。

「こんな企業が1万円?」という世界。小網代はそれではどうにもなりません。では何があるかというと、企業の宣伝広告と CSR の中間です。企業会計の中でも宣伝広告費は大きく使えます。CSR は少額ですが、うまくやると関連経費で百万円単位の寄付ができます。楽天は「楽天の森計画」という CSR 事業を行い、全国の拠点を支援しています。小網代も候補になったのです。次の段階に進むと、最初から宣伝広告費で来るとしています。そうした直接お金が入る仕掛けを今県と一緒に作っています。



(株)トヨタマーケティングジャパンという会社はトヨタのアクアという車の販売に絡み、「アクアソーシャルフェス」という全国環境イベントを推進しています。イベントと環境再生事業の2本立てで、ぼくは全国アドバイザーの一人です。アクア製造の地元は北上川なので、北上川流域で森や湿原を守るのにお金を投入しています。全国各地の環境再生運動にもお金を出しています。ぼくが活動しているのは鶴見川です。流域思考の地元なので源流に森をつくり、中流に湿原を再生し、河口も再生していますが、それぞれに事業予算が出ています。

ぼくは CSR ではなくプロモーションを誘導すれば、防災でも福祉でも環境でも画期的な展開があると思います。企業は「うまく動く」ならいい。1億円の宣伝広告費からたとえば数百万円を回せばいいだけです。日本の自然保護運動はあまりにもイデオロギー左派に偏り過ぎて、企業が警戒してしまいます。環境や福祉や防災の問題で市民と現場でつきあった企業の社員が、管理職になり社長になっていくことが、これからの自由主義社会では重要です。企業からもっとお金をもらえばいい。企業はお金を出せます。でも、出せるような段取りが市民側にできていないのですね。

Q 宣伝広告費からお金が出る場合、企業名を出すのでしょうか。

岸 企業は今きわめて洗練されています。東芝は何も言わずに 250 万円寄付しました。県は名前を出すなど言いますが、それはあり得ないと言い、「生息地を失ったハマカンゾウを再移植しています。実行主体/小網代野外活動調整会議、支援/東芝ライテック」と看板に書いていいかと聞いたら、OK してくれました。それならうちもやりますと大日本印刷も楽天も来ました。

Q 大々的に「東芝の緑地」とはやらないわけですね。企業はそれでいいのでしょうか？

岸 企業の環境報告にはもちろん掲載されます。大きな企業は必ず年間環境報告を書かなければなりません。たとえば東芝は「生物多様性貢献で NPO 小網代野外活動調整会議と連携して、小網代でハマカンゾウ再生の努力をしました」と書き、日経の環境評価を 3 年くらい取っていると思います。

● 外来種だからではなく、悪いことをするから退治する

Q 外来種の対応について教えていただきたいです。

岸 生物多様性条約には「外来種はエラジユケート(全滅)あるいはコントロール(抑制)」させろと書いてあります。日本国はそれを受けてランクを決め、特定外来生物は持ち出し禁止などと決めています。鶴見川には特定外来生物ウシガエルがいっぱいいますが、外来生物法ではウシガエルのオタマジャクシをもって子どもが国土交通省管理の鶴見川敷地から道路を超えた瞬間、罰金刑です。われわれは小網代でも鶴見川流域でも、ウシガエルをとった子どもに「持って帰るとおまわりさんに怒られるから放してやりなさい」と言います。法律的に元の生息地に放すのはいいんです。われわれも必要があれば殺処分しますが、ほかの仕事において外来種全滅作戦に集中するとか、そういう労力の使い方はしません。

でも、特定外来生物アレチウリについては、ぼくが代表をしている鶴見川流域ネットワークキングがたぶん全国的にも最もお金を使い、徹底的な(駆除)技術を持っています。アレチウリを退治すると、アレチウリと同じ悪いことをカナムグラとかヤブマメがやります。われわれはカナムグラもヤブマメも退治します。外来種だからではなく、同じ悪いことをするから退治します。

今、小網代にはセイタカアワダチソウがきれいに咲いています。外来種をこんなに生やしてどこが自然保護だと怒る人がいるので、先週からスタッフに「目立つところにある不自然に生えているセイタカアワダチソウは抜け」と言って、1000 本くらい抜きました。

でも、テラス脇のセイタカアワダチソウはわざと咲かせています。10 月、小網代の森にはアサギマダラが下りて来ます。たっぷり吸蜜して栄養を取らないと海に出られません。昔、農業が達者だったころはキク科のフジバカマなどが吸蜜源でした。でも、今は「アサギマダラちゃん、ここで何が好きなの？」と聞いたら、「いちばん好きなのはセイタカアワダチソウ」って言います(笑)。アサギマダラに会いたかったら、セイタカアワダチソウが咲いている海岸の谷戸に待機すれば見られます。アサギマダラがいるうちは刈るなど言っています。

外来種だから絶滅させろという思想は生態学のどこからも出てきません。すべての生物は少し外来種で少し在来種です。あるときポンと入る。入ったときは外来種です。それが広がって 1 万年もたてば在来種という顔をしています。1000 年ならどうですか。100 年、10 年ならどうですか。地球上の生物は種ごとに種の社会を持っています。狭い地域の共同帯に縛られているのではなく主体性を持って生きています。

● どんな自然を守るか、決めるのは人間

岸 それがわからなくなった時代が、1900 年代前半にありました。特に、アメリカを中心に全体主義

生態学が流行り、「群集とは局所において進化的に適応したものの集まり。新しいものを1つ入れると生態系が破壊される」といった理論を展開しました。そんなのは古く、まじめな生態学者は誰も信じていません。たとえば、熱帯雨林に100種類植物があるとします。分布域は1種類ごとに全部違う。そこにいる種を1種絶滅させても、その種のほとんどはよそで暮らしていますから絶滅しません。

今年、思想社から『外来種は本当に悪者か』という本の翻訳が出て、ぼくが頼まれて解説を書きました。そうしたら、岸の解説がけしからんと言って、有名大学の人たちが大騒ぎをしています。でも、外国では今、そうした論文や本がどんどん書かれています。みんなが英語を読めば、「岸さんのいうことはこの間あの本で読んだ」という世界です。英語を勉強していただき、ぼくと一緒に考えていただければ、ぼくの言っていることは異様ではなく国際標準だとわかると思います。

外来種は危険なものがいっぱいあります。危険な場合、僕らは全力で絶滅させます。でも、それは外来種だからではなく、危険だからです。危険なことをするのが在来種なら、在来種でも絶滅させます。

では、どんな自然を守るのがいいのか。誰も決めてくれません。ここが一番の核心です。残念ながらもうどこにも基準はありません。人間は地球を温暖化させるほど変えてしまったから、人間が目標を決めます。地域が持つポテンシャルを使ってお金を回し、快適で安全で生きものが賑やかに暮らしていても豊かになるように作るしかありません。

Q 外来種は生命力が日本の種に比べると数段に強いと思いますが、いかがですか。

岸 もし外来種が日本の種より生命力が強ければ、日本はとうの昔に全部外来種の世界になっています。生命力の弱い外来種もいっぱいいて、定着しない外来種が圧倒的です。中にとんでもなく悪い子がいるだけ。外来種だから生命力が強いということは生態学的にまったくありません。そういう考え方を広めることはとても危険です。

● 「生きものの賑わい」という言葉はぼくがつくった

Q 自然を戻すのではないとのことでしたが、先生ご自身はどういう自然を自然というのでしょうか。

岸 自然という言葉は英語でネイチャーです。この言葉は生物多様性保全、環境保全にはもう役立たないので、アメリカでは別な言葉をつくりました。生物多様性(バイオディバーシティ biodiversity)です。正しくは生物多様性ではありません。バイオは生物ではなく生命。環境省が訳語を確定するとき、東京大学の先生方は生物多様性と言い、ぼくは生命多様性と言って激しく対抗しました。多数決(?)でぼくが負けました。生命多様性が生物多様性となってしまったために、元の言葉の意味が何か日本人にわからなくなりました。

国際条約では「生物の種と遺伝と生態系の多様性」と定義し、英語のバイオディバーシティ・コンサーベーション(biodiversity conservation、生物多様性保全)は、賑わいう生きものと共に、森や海や流域の生態系を守りましょうという意味です。これが本来のバイオディバーシティ戦略の国際標準です。日本ではそうなっていません。

仕方がないので、ぼくは1980年代、小網代で新しい動向を日本語で言うとき、生きものについては「生きものの賑わい」と言い、生態系を含めるときには「自然の賑わい」と言うようにしました。ところが、ぼくに反対する東京大学の人たちがこれらを見事に剽窃して使っています。ある先生など自分が言い出したかのように言いふらしてしまったので、講演会ではときどき「岸先生はW先生のファンですか。私もです。生きものの賑わいっていいですね」と言われます(笑)。「じつはそれ、ぼくがつくった言葉です。W先生がぼくの論文や本をひとつも引用しないだけです」と答えると啞然とされます。

Q 手賀沼流域フォーラムでは手賀沼のよさをCODではなく、生きものの多さによって測りたいと考

え、「手賀沼にいのちのにぎわいを」という言葉を使わせていただいています。

岸 いいですね。小網代のプロモーションでぼくが最初に作ったのは『いのちあつまれ小網代』という本でした。生物多様性を「いのち集まれ」で表現しています。

いのち、多自然は大和言葉です。ドイツ語にナトゥールナーエ・バッサバウ *Naturnaher Wasserbau* という言葉があります。近自然工法と訳され、「多自然はこれの誤訳」という頓珍漢な方々があります。日本の雅楽の創始者(の一人)は多自然麻呂(おおのじぜまろ)という人です。日本人は自然多き世界が好きです。多自然は大和言葉、日本語。国土交通省が多自然川づくり見直しの委員会を開催したときぼくも委員で、近自然派と多自然派が激しい喧嘩になりました。ぼくは「日本の言葉だから多自然でいい」と言いました。コンサルに多自然麻呂について調べてくれと言ったら大量の資料を持ってきて、誰も文句が言えませんでした。

近自然という昔に戻すというイメージがあるでしょう。多自然はみんなの努力で賑やかにする。雅楽の響きです。全然方向が違います。小網代は多自然流域にするのがぼくのビジョンであり、近自然流域なんて基準も決めようのない観念的なことはいけません。いのちの賑わい、多自然。日本列島に一番ふさわしい感覚だと思いますね。

● ベースは稲作時代と同じ水循環、土砂循環

Q 荒れた自然を人間の力で今のようにされましたが、どうあるのが小網代に最もいいとお考えですか。

岸 ぼくは小網代に 32 年つきあい、鶴見川源流域でも農業放棄された谷戸と 35 年つきあってきました。農業放棄された小流域がどんな変貌を遂げるかよく知っています。みんな、谷地形は底が平らと思うでしょう？ でも放置したら川が土を削って浸食運搬しますから、どんどん V 字になります。田んぼだったところから水が抜けて、はげができます。乾燥してササ原になります。どこも同じです。

小網代のような小規模流域は人間が水田耕作を始める前は、たぶん真っ暗で、ホタルもトンボもなくてアユも上がらない V 字谷だったと思います。その森に縄文人が火をつけ、雨が降り土砂が崩れて埋まりました。たぶん最初に V 字谷を埋めたのは縄文人で、平らになったアシ原で稲作が始まり、1000 年くらいやってきた。50 年前に水田耕作が止まったら、縄文時代に戻りはじめてしまいました。

われわれの考えは「水の循環、土の状況については稲作を尊重し、縄文時代には戻さない」ということです。稲作時代と同じ水循環、土砂循環をベースにして、ただしその場所にできる湿地には稲ではなく、1000 年間稲の片隅で生き延びてきたカエルとかトンボとか野草を自由に集めましょう。それが神奈川県とも調整した、小網代再生の基本です。

われわれの考えは「水の循環、土の状況については稲作を尊重し、縄文時代には戻さない」ということです。稲作時代と同じ水循環、土砂循環をベースにして、ただしその場所にできる湿地には稲ではなく、1000 年間稲の片隅で生き延びてきたカエルとかトンボとか野草を自由に集めましょう。それが神奈川県とも調整した、小網代再生の基本です。

小網代の急傾斜の深い山には手のつけようがありません。小さな枝谷戸の入り口には湿地再生の整備をしますが、その奥は杭を打ち山が崩れるにまかせます。土砂がどんどん落ちて堆積します。20 年くらいかけてもう一度谷の中間～上に砂防ダムのようなものをつくります。その堆積土の保水力が、谷の流れの定常流をささえてゆくはず。植物についてはあえてよそから持ち込むことはしませんが、来るものは拒まず、一部外来、一部在来がやってきて、悪いことをすれば絶滅させるけれども、悪いことをしなければ住み着いていい、というのがわれわれの考えです。

● 谷底に大きな湿原 bog, marsh, swamp を回復してゆく



Q 放っておけばどんどん浸食しませんか？ どんな管理を行っておられますか。

岸 谷地形で稲作をやる時、川は谷断面の一番高いところを通します。低いほうを通すと取水用の堰が必要になります。小網代では岩盤を穿って側溝のようにして、一番高いところに水を通していました。そして、水が田んぼに行ったら溜めて戻してを繰り返してきましたが、40年放置したら川はV字に掘れ、水田は乾燥してササ原になりました。ですから、もう一回川を高いところに移してやればいいのです。杭を打ち、大雨のときに水を高いほうへ高いほうへ押し寄せる。それで湿原になります。



Q それは毎日行うのですか？

岸 継続的な作業ですね。堰が壊れたらつくり直し、供給される水が増えたら新たな水路を谷の一番高いところに引きます。ササ原はなくなりましたが、まだ水分が不十分で、カナムグラなどが繁って収集のつかないところがあります。そこにもっと水を持ってくるよう努力しています。

Q それをボランティアの人たちがやっているのですか？

岸 ボランティアではできないので、1日6000円支払うスタッフが、定時間でしっかり土木作業をやるのが基本です。ボランティアを使わないと悪いNPOと言われるし(笑)、自然観察をただでやらず、15人で1万円とる悪徳自然保護団体と言われるので、毎月第3日曜日の午前9時半に京浜急行三崎口駅に来ていただくと、50人でも100人でも全員ただでご案内し、代わりに簡単なボランティアをしていただくことになっています。そのとき集まった人の顔を見て、今日は1人セイタカアワダチソウを10本ぬいてもらおうかなとか、ゴミを拾ってもらおうかなとか、スタッフが決めます(笑)。

Q(司会) ありがとうございます。お話は尽きませんが、そろそろ時間が来ました。

岸 ぼくから感想と提案をひとつ。私はたぶん43年くらい前に一度、手賀沼に来たことがあります。龍ヶ崎市に中沼という小さな沼があり、そこで大学院生のころハゼの研究をしていましたが、あるとき、せっかく車で来ているから手賀沼を見ようという話になり、田んぼの中を歩いて行ったら前方に笹の万里の長城みたいなのが見えてきました。左右全面が笹。その向こうが手賀沼でした。笹の切れ目を通して沼に降りたら、信じられないくらい緑色でした。これはどうしようもないだろうと話しましたが、地元を知っている人が「まだタナゴがいっぱいいるんだ」と言ったのをよく覚えています。

今回は高いところから見せていただき、なんてきれいになったんだろうと思いました。聞けば、外来植物(ナガエツルノゲイトウ)で苦労しているとのこと。また、ハスが悪いことをしているとのことでしたが、ぼくは見た瞬間、「このハスは商売になる」と思いました。我孫子市側から音を立てず油を出さない電気船で、ハス田の中に水路を切って周遊する。真ん中に数十人乗れるようなデッキをつくって、そこで弁当を食べる。ただし、その周遊はお1人様1000円。儲かったら、柏市側のハス管理のNPOに年間500万円くらい持たせてくれれば、ハスの拡大は見事になります。ハスの実は使えるし。アジアの人はハスの茎も食べるからサラダもいい。放射能の問題はありますが、これが解決したらハスの実なんかありとあらゆる用途がありますよ。

ぼくは町田に住んでいて、自宅から1キロほどの谷降りると1ヘクタールくらいの大賀ハスの畑で、花の咲く時期には流域から撮影隊が殺到します。市の施設では大賀ハスを使って茄糸織という織物をつくったり、実を使って納豆をつくったり、いろいろ工夫をしています。ハスの生息地がこんなでっかいなら国際級じゃないかと思いました。今日の感想です。

司会 最後にご提案ありがとうございます。今日は興味深いお話をありがとうございました。

※特記の無い写真、資料はすべてNPO法人小網代野外活動調整会議提供